大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の実態

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002740

泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の実態

松　本　直　樹

Journal of Language and Culture
Language and Information
Vol. 6 (2011)
Department of Language and Culture
School of Humanities and Social Sciences
Osaka Prefecture University

言語文化学研究（言語情報編）
2011・3　第 6 号抜刷
大阪府立大学人間社会学部　言語文化学科

泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の実態

松　本　直　樹

1. はじめに

山本（1962）によると，大阪府内の方言は，摂津方言，河内方言，和泉方言の 3 つに分類され，それぞれにいくつかの下位分類が存在する。だが，「ことばの地域差が少しずつ薄れ，大阪共通語のようなものがすでに出来上がっているのは事実である」（岸江 2004）とあるように地域差が以前に比べて小さくなったことが指摘されている。若年層についても「現在居住地と異なる場所で生まれ育ったり，両親が他地方出身者であったりするなど，多様な言語的背景を持っている人がいるが，自らの話しことばについての内省と，実際の話しことばそのものに関しては，その多様性は反映されず，彼らの話しことばは『若年層の関西方言』として均質的なものである」（高木 2006）といった指摘がある。つまり「関西の若年層」という大きな括りで，共通した方言使用と意識が見られるということである。

いっぽうで，大阪府には堺市南区を中心として泉北ニュータウンが広がっており，上述したような「関西の若年層」が多く居住しているが，当該地域の居住者の間では，「隣接しているが，堺市中区などとはことばが違う」という意見がある。本稿では，泉北ニュータウンと隣接地域である堺市中区の最も大きな差異と思われる都市性の違いに注目しつつ，両地区における方言使用における，ことばの多様性を明らかにすることを目的とする。

以下，2 節で調査地域と調査方法について説明し，3 節では関西若年層の否定辞を扱った高木（2006）と西神ニュータウンの若年層の否定辞を扱った朝日（2008）とを比較しながら，4 つのデータの否定辞の使用に差があることを示す。また 4 節では，泉北ニュータウンと隣接

地域に絞って，従属節内で否定辞使用に差があることを述べ，5 節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 調査概要

2. 1　泉北ニュータウン

泉北ニュータウンは大阪府によって開発された大阪府堺市南区を中心に広がる大規模なニュータウンで，一部堺市中区，和泉市を含んでいる。1967 年に入居が始まり，平成 20 年度版の堺市統計書によると，およそ 15 万人がこのニュータウンに居住しており，町並みとしては団地が立ち並ぶ地域と一戸建て住宅が立ち並ぶ地域とに分かれる（写真 1，2 参照。いずれも筆者撮影）。泉北ニュータウン内には幹線道路も多く，泉北高速鉄道の泉ヶ丘駅，栂美木多駅，光明池駅があり，各駅には南海バスも発着するなど交通の便は良い（図 1 参照）。泉北ニュータウンに移住してきた人々の出身地についての資料は見当たらないが，泉北ニュータウン開発中の堺市全体の人口動態をみてみると，府外からの転入と府内からの転入がほぼ同割合であり，泉北ニュータウンもこれに準じるのではないかと思われる。

なお，朝日（2008）で扱われた西神ニュータウンと泉北ニュータウンとでは，開発時期や規模，施設もさることながら，地理的な環境が大きく異なる。西神ニュータウンは近隣の地域が谷にあたっており，地理的に孤立した新しい都市のため，周辺の方言が受容されにくかった。したがって，西神ニュータウン内で移住者による独自の言語変種が形成されていったのであろうと朝日（2008）も指摘している。一方で泉北ニュータウンでは「ニュータウンことば」といった名称の言語変種は確認されていない。

写真１　泉北ニュータウン内の一戸建てが立ち並ぶ地区

写真２　泉北ニュータウン内の団地

2. 2　隣接地域

ここでは，泉北ニュータウンと隣接した地域である堺市中区を比較する。以下，本稿でいう「隣接地域」とは堺市中区を指す。堺市西区は泉北ニュータウンと接してはいるが，接している付近に農地や工場が多くあまり人が居住していないことと，中区の方が接している部分が広いことを考慮し，堺市西区は対象外とした。また大阪狭山市や河内長野市も接しているものの，あいだに山があり隣接していないことや，行政区画をまたぐことから対象外とした。隣接地域にも，泉北高速鉄道の深井駅があり，南海バスが発着しているが，目立った繁華街やショッピングセンターもなく，昔からの伝統的な集落と住宅地が併存し，農地や溜池が点在している。泉北ニュータウンのように大規模な都市計画に基づいて開拓された町ではなく，泉北ニュータウンとは異なった町並みとなっている。

そして先に述べたように堺市中区は泉北ニュータウンとは地理的に連続しており（写真 3 参照。筆者撮影），交通網も発達していることから両地域の交流は盛んである。インフォーマントの内省においても，「道を一本隔てているだけなので，歩いて区（すなわち「ニュータウン」の南区と「隣接地域」の中区）を越えて買い物に行ったり，塾に通ったりといったことは日常的なことである」といった意見が多数寄せられた。そういった地理的環境や交流の違いが，ことばにどのような影響を与えるのか，興味深い。

写真３　道路を挟んで右側が泉北ニュータウン，左側が隣接地域

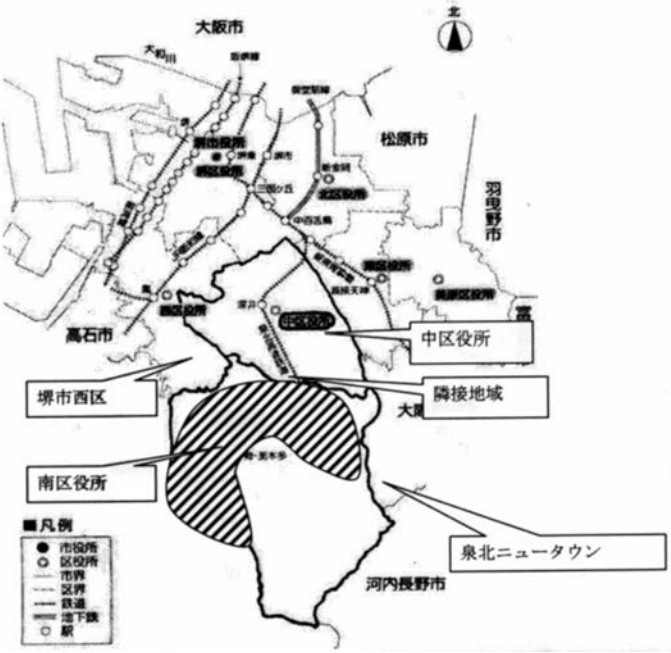

図１　泉北ニュータウンと隣接地域（平成 20 年度堺市統計書に加筆）

2. 3　談話調査

泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用をなるべく実態に近い形で把握するため，談話の録音調査を行った。まずそれぞれの地域で生まれ育った18歳から25歳までの生え抜きのインフォーマントに，同性の親しい友人を一人挙げてもらった。その友人もそれぞれの地域で生まれ育った 18 歳から 25 歳までの生え抜き，あるいはそれに準ずる人であることを条件とした。

その二人で自由に会話してもらう形式で，30 分間自由に会話してもらい，IC レコーダーでそれを録音した。その中の始めと終わりの 5 分ずつをカットした 20 分を国立国語研究所（2006）の方法を参考にして文字化し，分析対象としている。30 分以上のデータが得られた場合は，前後のカットする時間を調整して 20 分のデータとしている。話題を特に限定することはしなかったが，インフォーマントが話題に困らないように「話題がない場合は卒業アルバムや旅行の写真を使って思い出話をしてください」という旨を予め伝えた。録音する場所は「なるべく静かな場所で」ということだけを伝えて，それぞれのインフォーマントに一任した。また調査時は二人きりで会話をしてもらい，調査者がそこに同席することはしなかった。

自然な談話を収録することを第一に考えるため，話題の違いなどは後述する分析において特に考慮しない。またインフォーマントの両親の出身地について，両地域とも大きな違いはなかった。こうした調査を 2007 年から 2009 年にかけて泉北ニュータウンで 5 件（男性ペア 1 件，女性ペア 4 件），隣接地域で 5 件（男性ペア 3 件，女性ペア 2 件）の計 10 件実施した。調査時におけるインフォーマントの詳細な情報は，本稿末に示すとおりである。なお，高木（2006）の調査は 1993 年から 1997 年，朝日（2008）の調査は 1999 年から 2001 年にかけて行われたものである。

3. 4つの地域の比較

3. 1 分析対象

関西方言において否定辞は，「ヘン」，「ヒン」や「ン」に加えて，伝統的な否定辞である「ズ」や否定過去で使用される「ナンダ」「ヘンダ」などがある（郡 1997）。談話調査では，それに加えて標準語形「ナイ」やその変異である「ネー」などが出現したが，「ズ」は2例のみと出現数が極端に少なく，「ナンダ」は出現しなかった。「ネー」も1例のみで「ヤッテランネー」と冗談めかして発話されたものであった。「ヒン」については「ヘン」が上一段動詞に接続した際に起こる音韻的な変化なので，「ヘン」と同じものとして扱う。各形式の用例は次のとおりである。

例1…「それはやってられヘンな（それはやってられないな）」
例2…「何もできヒン奴やな（何もできない奴だな）」
例3…「全然わからンわ（全然分からないな）」
例 4…（「最近どう？」の質問に対して）「何ら変わらズ（何も変わってない）」
例 5…「こっちに帰ってきてたとは知らナンダ（こっちに帰ってきてたとは知らなかった）」
例6…「昨日は学校に行かヘンダ（昨日は学校に行かなかった）」
例7…「どうしようもネー（どうしようもない）」

ここでは出現数の少なかった「ナンダ」「ズ」「ネー」は分析の対象外とし，「ヘン（ヒン）」「ン」「ナイ」のみ分析，考察する。この枠組みの中で高木（2006）のデータを，関西若年層を代表するデータと位置づけ，朝日（2008）の西神ニュータウンのデータ，本研究の泉北ニュータウン，隣接地域のデータとを比較していく。

3.2 五段動詞に接続する否定辞基本形

まずは五段動詞に接続する否定辞の基本形について分析する。ここ

で言う「五段動詞に接続する否定辞の基本形」とは五段動詞に接続する否定辞の中でも過去形「～ヘンカッタ」や「～ナクテ」のように活用がなされていない五段動詞＋「～ヘン」「～ン」「～ナイ」の 3 項目のことを指す。例えば本研究の談話調査では以下のような例が見られた。なお〈　〉は談話調査で実際に得られた発話であり，〔　〕内は発話したインフォーマントの ID である。ID 記号の付し方については，論文末の「インフォーマント情報」を参照されたい。

〈1〉　あーうまくマワラヘン(回らへん)よなー〔RF5〕
〈2〉　一万円しかノコラン（残らん）ってゆっとってー〔NF5〕
〈3〉　症例報告書をカカナイ（書かない）とー〔NF7〕

本稿では,泉北ニュータウンと隣接地域の特徴を明らかにするため，高木（2006）の関西若年層の五段動詞に接続する否定辞基本形の出現割合と，朝日（2008）の西神ニュータウン若年層の五段動詞基本形のデータと比較する。五段動詞に接続する否定辞の基本形は，否定辞の中でも使用されやすく，比較しやすいからである。朝日（2008）では，西神ニュータウン若年層のデータは，両親の出身地によって兵庫県出身者と他地方出身者に分けられている。だがここでは関西若年層，西神ニュータウン，泉北ニュータウン，隣接地域での比較なので，兵庫県出身者と他地方出身者を合計した割合を「西神ニュータウン」として比較している。地域別に出現した形式と割合を示す。

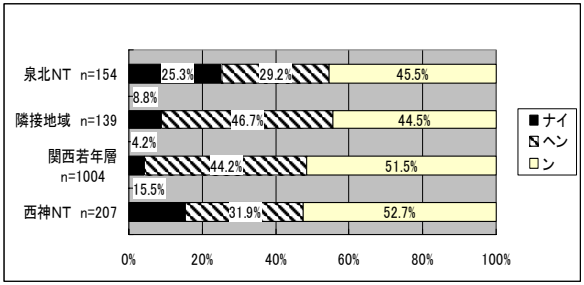

図 2　五段動詞の否定辞基本形の割合（n は出現数）

図 2 を見ると「ン」の使用率は，若干のばらつきはあるものの，4 つのデータともほぼ変わらない。いずれの地域においても，五段動詞に接続する否定辞基本形のおよそ半分が「ン」で占められており，いずれの地域でも同じように使用されている様子が分かる。だが,「ナイ」の使用率に関しては関西若年層＜隣接地域＜西神ニュータウン＜泉北ニュータウンの順で上昇し,「ヘン」の使用率は隣接地域≒関西若年層＞西神ニュータウン≒泉北ニュータウンとなっている様子が分かる。

「ン」は「ヘン」に比べて西日本で古くから使用されていた形式であり（金沢 1998），どの地域においても安定して使用されている様子が分かる。そして「『ン』に変わって登場した『ヘン』が近畿一円を席巻しつつある」（岸江 2005）という指摘どおり，関西若年層では「ン」に次いで「ヘン」の使用が多くなっている。そして隣接地域の否定辞使用は関西若年層とほぼ変わらない。また隣接地域と関西若年層では 2 つのニュータウンに比べて「ヘン」の使用率が高い。残差分析の結果も，関西若年層は他地域に比べて「ヘン」の使用率において 1%水準で有意に高い。高木（2006）にある「基本形でもっとも多く用いられる否定辞は，動詞の活用型や拍数にかかわらず～ヘンであるということができる」といった指摘に一致する。隣接地域においても,「ヘン」が使用される割合が最も高かった。

逆に二つのニュータウンでは隣接地域，関西若年層に比べ「ナイ」が使用されやすく，泉北ニュータウンにおいては「ナイ」と「ヘン」の使用がほぼ拮抗している。西神，泉北の両ニュータウンの「ナイ」の使用率は，残差分析の結果，1%水準で有意に高かった。逆に「ヘン」の使用率は西神ニュータウンで 5%水準,泉北ニュータウンでは 1%水準で有意に低かった。そして，関西若年層よりも隣接地域で「ナイ」の使用が多いことを考えれば,「ン」から「ヘン」に変化してきた否定辞が，ニュータウンにおける共通語化によって「ナイ」へと変化していると考えることができる。一方で「ン」の使用については，4 つの地域で大きな違いは見られなかった。

3．3　過去否定の「否定辞＋kaQ 形」

本節では「ナカッタ・～ヘンカッタ・～ンカッタ」といった，「否定辞＋kaQ 形」について分析する。kaQ 形になる形式には「カッタ」以外にも，連用形である過去テ形（「～ンカッテ」「～ヘンカッテ」），過去仮定形（「～ンカッタラ」「～ヘンカッタラ」）などがある。しかし今回，談話調査のデータでは過去テ形と過去仮定の出現数は泉北ニュータウンで 2 件，隣接地域で 2 件と少ないため，カッタ形のみに絞って分析していく。また接続する動詞についても，朝日（2008）の西神ニュータウンのデータとも比較するため，五段動詞にのみ絞って考察していく。ここでも 3.2 と同じく朝日（2008）の西神ニュータウンの若年層のデータは，親の出身地によって兵庫県出身者と他地方出身者に分けられていたが，西神ニュータウン全体と比較するため，それらを合計したものを使用している。各形式の出現数と割合を示したのが図 3 である。なお，談話調査で得られた発話例は次のようなものがあった。

〈4〉悪ロキケヘンカッタ（聞けへんかった）けどー〔RF9〕
〈5〉しんどいって言うのもワカランカッタ（分からんかった）〔NF10〕
〈6〉あれ，ユッテナカッタ（言ってなかった）っけ？〔RM2〕

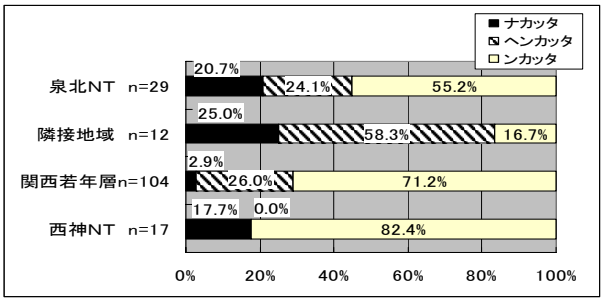

図３　五段動詞に接続する kaQ 形の割合（ｎは出現数）

隣接地域では，「ナカッタ」の使用率が 4 つの地域の中で最も高い一方で，「ヘンカッタ」の使用が約 60％を占め，「ンカッタ」は 20％にも

満たない。図 2 と同じように「ヘン」を多用する傾向が見られる。また西神ニュータウンでは「ナカッタ」と「ンカッタ」しか出現せず,「ンカッタ」が 80%以上を占めているが，泉北ニュータウンでは「ヘンカッタ」が出現し，「ンカッタ」も 50%程度にとどまった。残差分析においても，西神ニュータウンでは「ンカッタ」の使用率が他地域に比べて 1%水準で有意に高かったが，泉北ニュータウンでは，5%水準で「ナカッタ」の使用が有意に高かった。同じ五段動詞でも基本形と kaQ 形では，観察された地域差の中身が異なるということである。同じ関西のニュータウンでも地域によって方言使用に差があると言える。このような違いが生まれる原因はいくつか考えられるが,隣接地域で「ヘンカッタ」が多く使用されていることが大きいと思われる。日常的に交流のある隣接地域で「ヘンカッタ」が多用されていれば，それが泉北ニュータウンの「ヘンカッタ」の使用率に影響を与えている可能性が考えられる。

4. 泉北ニュータウンと隣接地域の比較

4. 1 主節と従属節

本章では泉北ニュータウンと隣接地域の差に絞ってみていく。その中で，どういったときにどの否定辞が出やすいか，あるいは出にくいかを調べるために，特に主節と従属節における違いに注目した。ここでは全体の傾向を把握するために五段動詞に限らず，談話調査内で見られた従属節内のすべての否定辞を分析の対象とする。そのため，3.2 で述べた「～ナイ」「～ヘン」「～ン」のような基本形であれば，五段動詞に限らず全てを抽出して分析した。それぞれの地域で主節と従属節での否定辞の出現割合に注目して，比較していく。

4. 2 泉北ニュータウンの従属節内の否定辞使用

図 4 は泉北ニュータウンにおける主節内と従属節内の否定辞の使用割合を示したグラフである。泉北ニュータウンでは，従属節内では主節に比べ,「ナイ」の割合が減少し,「ヘン」や「ン」などの方言形が

使われやすいという結果が得られた。中でも従属節内での「ヘン」の使用は40%を超えており，3.2や3.3のように隣接地域に比べて方言形があまり使われていなかった泉北ニュータウンであるが，従属節内では方言形が使用されやすいということが分かる。

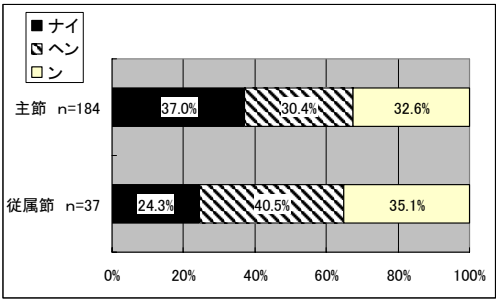

図4　泉北NTの主節と従属節の否定辞の比較（nは出現数）

さらに同じ後続形式が2例以上の出現したものに絞って詳しくみていく。2例以上の出現が見られた形式には「ッテ（ト）」「ミタイナ」「カラ」「ケド」「体言」があった。それぞれの用例を以下の〈7〉から〈11〉に示した。ここで言う「体言」には一般名詞だけでなく形式名詞も含まれている。なお，後続形式について出現が1例のみだった〈12〉～〈16〉は「その他」の項目とした。泉北ニュータウンの談話調査で得られた発話の中には以下のようなものであった。

〈7〉答えられヘンッテ思ってー〔NM1〕
〈8〉これ使えヘンミタイナこと言って〔NF8〕
〈9〉あっし（私）そんなんできヘンカラ断ってん〔NF7〕
〈10〉俺は応援しナイケド本番頑張ってな〔NM2〕
〈11〉全然きーヘン服もらってもー〔NF5〕
〈12〉俺は寝ナイトカ無理だな〔NM2〕
〈13〉休まヘンデ頑張る〔NF8〕
〈14〉あんたのやるやらヘンヲ大事にせな〔NF8〕

〈15〉それは変わる変わらンチャウ〔NM1〕
〈16〉買わントカあかんやろ〔NF5〕

使用された否定辞を後続形式別にまとめたものが表 1 である。

表 1　泉北ニュータウンにおける従属節内の否定辞と後続形式
（割合は小数第二位で四捨五入）

泉北 NT	ッテ(ト)	ミタイナ	カラ	ケド	体言	その他	合計
ナイ	5 (13.5%)	0 (0%)	1(2.7%)	2 (5.4%)	0 (0%)	1 (2.7%)	9(24.3%)
ヘン	7 (18.9%)	3 (8.1%)	1(2.7%)	0 (0%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)	15 (40.5%)
ン	3 (8.1%)	3 (8.1%)	1(2.7%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)	13 (35.1%)
合計	15 (40.5%)	6 (16.2%)	3 (8.1%)	4 (10.8%)	4 (10.8%)	5 (13.5%)	37 (100%)

後続形式では，引用の用法である「ッテ（ト)」「ミタイナ」の使用の多さが目を引く。全体で 37 例ある従属節内の否定辞使用のうち，56.2%にあたる 21 例を占めている。更に「ッテ（ト)」「ミタイナ」のうち 16 例が「ヘン」「ン」に後続したものであった。引用以外の後続形式では，出現数が少ないということがあるものの，あまり偏ることなく使用されていた。引用とは，主に自分や他人の以前の会話や思ったことを再現しようとするものであり，そこで他の後続形式より「ヘン」「ン」の使用率が高いということは，自分や周囲は主に方言形を使っている，という意識が働いているのではないかと考えられる。その一方で「ナイ」9 例のうち 5 例が「ッテ」という形式で実現されていることから，「ナイ」だけで見ると，「ナイ」は引用の用法で使用されやすいとも言える。

4．3　隣接地域の従属節内の否定辞使用

ここでは隣接地域における，主節と従属節の否定辞使用を比較する。

図５をみてみると，隣接地域では主節内においても従属節内においても圧倒的にヘンが多い。主節内で５割以上，特に従属節内では６割以上で「ヘン」が使用されている。その一方で「ナイ」の使用は１割に満たない程度に留まっており，泉北ニュータウンの３分の１程度しか「ナイ」は使用されていない。前節の分析と合わせて考えても隣接地域では否定辞として主に「ヘン」が使用されていると言えるだろう。

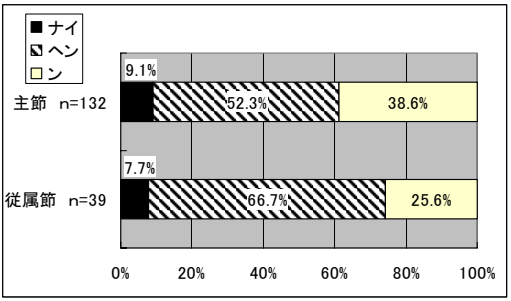

図５　隣接地域の主節と従属節の否定辞の比較（ｎは出現数）

泉北ニュータウンと同じ観点で，否定辞の使用を後続形式別にまとめたものが〈17〉から〈21〉である。後続形式について出現が１例のみだった〈22〉～〈24〉は泉北ニュータウンと同様に「その他」に分類した。

〈17〉回れヘンッテ言うやん〔RF6〕
〈18〉ちょっとくれヘンミタイナ〔RF5〕
〈19〉学校にコーヘンカラなー〔RM7〕
〈20〉分からヘンケド知ってる気がする〔RF10〕
〈21〉あいつはもてヘン奴やからしゃーない〔RM2〕
〈22〉せーヘンジャすまされへん〔RM7〕
〈23〉こーヘントカ知らんし〔RM4〕
〈24〉行ける行かれヘンノ判断してや〔RM8〕

これらの使用状況をまとめたものが，次の表 2 である。

表２　隣接地域における従属節内の否定辞と後続形式
（割合は小数第二位で四捨五入）

隣接地域	ッテ(ト)	ミタイナ	カラ	ケド	体言	その他	合計
ナイ	1 (2.6%)	0 (0%)	1 (2.6%)	1 (2.6%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (7.7%)
ヘン	4 (10.3%)	3 (7.7%)	7(17.9%)	7(17.9%)	2 (5.1%)	3(7.7%)	26 (66.7%)
ン	6 (15.4%)	1 (2.6%)	0 (0%)	2 (5.1%)	1 (2.6%)	0 (0%)	10 (25.6%)
合計	11 (28.2%)	4 (10.3%)	8 (20.5%)	10 (25.6%)	3 (7.7%)	3 (7.7%)	39 (100%)

ここでも泉北ニュータウンと同じように引用では，15 例中 14 例で「ヘン」か「ン」が使用されている。しかし泉北ニュータウンではあまり偏りが見られなかった,「その他」の後続形式についても隣接地域では「ヘン」に使用が集中しており，これらの使用が「ヘン」の使用率を押し上げている様子が分かる。

つまり泉北ニュータウンでは，引用に方言形が多かったことから，過去の自分や他人のことばを持ち出す際には方言を使っているが，自分のことばとして話す場合には，隣接地域ほど方言は出現しない。これは,（実際にはそれほど使用していなくても）自分たちは方言を使っているという意識が表れていると考えることができる。隣接地域では引用以外でもあまり偏らずに方言形が使用されていることから，そうしたことばに対する意識だけでなく，実態においても方言形が多く使用されていると言えるだろう。

5. まとめ

本稿では，泉北ニュータウンと隣接地域の談話資料から獲た方言使用の様子を，否定辞を中心として見てきた。まず両地域のデータを，関西を代表するデータとして高木（2006）の「関西若年層」，泉北ニュ

ータウン以外の関西のニュータウンのデータとしての朝日（2008）の「西神ニュータウン」と比較した。その結果，広い意味では関西若年層として包括される泉北ニュータウン，隣接地域であっても，それぞれ関西若年層とも西神ニュータウンとも違った傾向があることが分かった。つまり五段動詞に接続する否定辞の基本形，～kaQ 形における「ナイ」「ヘン」「ン」の割合において，泉北ニュータウンでは「ナイ」と「ヘン」が同じぐらいの割合で使用されているが，隣接地域では「ヘン」の使用が非常に多い。関西若年層と比較しても「ヘン」の使用が多いことから，旧来の農村地域が残るなど，隣接地域は方言が使用されやすい環境にあることが原因と思われる。そういった環境の中に後から造成された泉北ニュータウンでは，隣接地域との交流によって，西神ニュータウンとも違った方言使用の状況が生まれたのであろう。

しかしその一方で，主節内と従属節内で使用される否定辞を比較したところ，隣接地域では従属節の後続形式に関わらず「ヘン」の使用が多かったが，引用の用法に限ると泉北ニュータウンでも「ヘン」が多く使用されていた。引用形式とは自身や他人の会話を再現しようとするものであり，言い換えれば会話を再現しようとする場面に「ヘン」が多く使用される泉北ニュータウンと，場面にあまり囚われず「ヘン」が多く使用されている隣接地域ということができる。これは泉北ニュータウンにおいて，「自分たちは『ヘン』をはじめとした方言を多く使っている」という意識が存在する可能性を示唆しており，泉北ニュータウンの言語形成においても，引用形式が重要な位置を占めている可能性がある。こうした話し手自身のことばとその周辺の地域で使用されていることばに対する意識や，方言使用と意識の関係については，また稿を改めて論じたい。

大阪府立大学大学院人間社会学研究科　博士前期課程修了

（参考文献）

朝日祥之（2008）『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』　ひつじ書房

井上史雄（1980）「方言イメージの評価語」『東京外国語大学論集』30 pp.85-97 東京外国語大学

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院

岸江信介（2000）「『大阪語』とは何か」『言語』29-1　pp.40-48　大修館書店

岸江信介（2004）「大阪弁の中の多様性」『日本語学』23-11　pp.28-40 明治書院

岸江信介（2005）「近畿周辺圏にみられる方言の打消表現」『日本語学』24-15　pp.32-43　明治書院

郡史郎（1997）『大阪府のことば』平山輝男ほか編　日本のことばシリーズ 27　明治書院

国立国語研究所（2006）「日本語話し言葉コーパスの構築法」『国立国語研究所報告』124

真田信治（1988）「方言意識と方言使用の動態―中京圏における―」国立国語研究所『方言研究方法の探索』　秀英出版

真田信治（1996）『地域語のダイナミズム』地域語の生態シリーズ関西篇　おうふう

真田信治編（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版

真田信治・ロング，ダニエル（1992）「方言とアイデンティティー」『月刊言語』21-10　pp.72-79　大修館書店

真田信治・ロング，ダニエル編（1997）『社会言語学図集』　pp.160-163 秋山書店

高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて―談話から見た使用実態―」『現代日本語研究』6　pp.78-99　大阪大学日本語学講座

高木千恵（2006）「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊 2　大阪大学大学院　文学研究科日本語学講座

高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』5-4　pp.1-14　日本語学会
塚口義信・野村孝次（1982）「大阪府泉北地方の方言」『堺女子短期大学紀要 17』pp.77-108　堺女子短期大学
徳川宗賢・真田信治編（1995）『関西方言の社会言語学』　世界思想社
中井精一（2001）「都市言語」ダニエルロング・中井精一・宮治弘明編『応用社会言語学を学ぶ人のために』pp.156-165　世界思想社
西尾純二（2009）『関西・大阪・堺における地域言語生活』OMUP ブックレット No.21「堺・南大阪地域学」シリーズ 12　大阪公立大学共同出版会
丹羽一彌（1992）「言語接触による方言形の理解と使用」田島毓堂　丹羽一彌編『日本語論究 1　言語学とその周辺』　和泉書院
細谷書子（2004）「大阪市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』6　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
山本俊治（1962）「大阪府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』　三省堂

参考資料

『堺市統計書』　平成 20 年度版　堺市財政局企画部政策調査担当編

談話調査のインフォーマント情報（年齢，居住歴は調査当時）

IDはRが隣接地域，Nが泉北ニュータウン，Mが男性，Fが女性を表している。

地域	番号	ID	年齢	性別	居　住　歴
隣接地域	1	RM1	21	男	0歳から現在　堺市中区小阪西町
		RM2	22	男	0歳から現在　堺市中区小阪荘苑
	2	RM3	21	男	0歳から現在　堺市中区小阪
		RM4	22	男	0歳から現在　堺市中区楢葉
	3	RF5	22	女	0歳から現在　堺市中区深井
		RF6	22	女	0歳から現在　堺市中区深井中町
	4	RM7	22	男	0歳から現在　堺市中区深井清水町
		RM8	23	男	0歳から現在　堺市中区深井清水町
	5	RF9	22	女	0歳から現在　堺市中区深阪
		RF10	21	女	0歳から現在　堺市中区深阪
泉北ニュータウン	6	NM1	22	男	0歳から現在　堺市南区茶山台
		NM2	21	男	0歳から現在　堺市南区茶山台
	7	NF3	21	女	0歳から7歳　堺市南区竹城台　7歳から現在同区深阪南
		NF4	21	女	0歳から3歳　西日本各地　3歳から現在堺市南区竹城台
	8	NF5	19	女	0歳から現在　堺市南区若松台
		NF6	19	女	0歳から現在　堺市南区桃山台
	9	NF7	21	女	0歳から現在　和泉市光明台
		NF8	21	女	0歳から7歳　和泉市光明台　7歳から現在同市室堂町
	10	NF9	19	女	0歳から17歳　堺市南区晴美台17歳から現在同区御池台
		NF10	19	女	0歳から1歳　堺市南区高倉台　1歳から現在同区晴美台